

地方都市の開業医であるエリコは昼食を終わらせるとふーっと大きなため息をついてから真後ろにある診察台の上にごろっと横たわると仮眠を取るための体制に入った。

(午後も予約がいっぱいだな・・・)

そんなことを考えながらうつらうつらしていると、頭の中から声が聞こえた。

(おい。午後の診察では重症な患者はいないだろうな?)

(マルバス?)

名を呼びかけるとエリコの頭の中にはふさふさとしたたてがみを生やしたライオンの姿が浮かんできた。

(ああ。あまりこう重症な患者が立て続けに来るようでは我が魔力も持たんど)

エリコはマルバスの言葉を聞くと今日の午前の診察ではぜんそく持ちで風邪をひいた患者と38度以上の熱が出た患者が来たのを思い出した。

(多分大丈夫だよ。ここ緊急とかじゃないからそんなに急ぎの人来ないし)

(まったく・・・子どもの病気というのはどうも見てもらえんな)

ツンとそっぽを向きながらそう言うマルバスにエリコはにこりと微笑んだ。

(マルバスは優しいからね。今日も患者さんにそっと癒しの魔法を使っていたんでしょ?)

エリコの頭の中でマルバスは一瞬光るとライオンのたてがみを思わせるライトブラウンの髪型の筋肉質な青年の姿になった。

(見てもらえないだけだ)

マルバスは腕組みをしたままツンとそういうと、あぐらで座り言葉を続けた。

(お前との生活ももう10年になるのか)

(そうだね。気が付けば私はもう50歳になっちゃった)

(お前はこの10年が長いように感じるか?)

(んー・・・親からこの診療所を受け継いでからもうそんなになるんだー。って思うけど、改めて考えると早かったような気がするな。マルバスが手伝ってくれるおかげで経営も凄く上手くいっているし。多分勤務医だった頃より収入が良くなっていると思う)

(人間というのは癒されることに飢えているのか?)

(飢えているというか、確実に病気が治る病院は凄く需要があるんだよ。やっぱり人間は健康でありたいと願うものだし、病気になったら医者にかかるのは普通のことだから)

(そうか。だからお前の診療所にはこんなに人が集まるのか)

(全部マルバスのおかげだよ。いつも親切にしてくれて本当にありがとう)

(そんな風に感謝されると、また患者を癒してやりたいと思うな)

(そう?でもあんまり無理をしなくてもいいんだよ?)

(無理はしていない。お前の感謝の気持ちが俺の魔力を回復させているからな)  
(あーそれね)

エリコはマルバスにそう言われると、マルバスが以前人間からの好意が自分たちの魔力を上げると話していたのを思い出した。

(感謝されるだけで魔力が回復するのって、なんかお買い得というか単純というか)

(お前だって患者から感謝されたら嬉しくてやる気が回復するだろう？それと同じで我々も嬉しくて魔力が回復するんだ)

(そういうところは人間と同じなんだね。本当に面白いと思う)

(そうか)

エリコはなんとなく自分の髪が撫でられているような感触を覚えた。

(マルバス。もしかして私の髪を撫でている?)

(分かるようになってきたか。人間の医者でも霊能力者というのはこの手のことがよく分かるようになるんだな)

(まあ10年も一緒にいるからね)

(とにかく午後の診察に備えて良く寝ろ)

(はい)